

ポピュラー音楽研究と音楽学研究
——学会と領域の関係性をめぐって——

＊日本音楽学会西日本支部第67回特別例会との共催

司会：西田紘子（九州大学／会員）

発表者：

小川博司（関西大学名誉教授／会員）

増田聡（大阪公立大学／会員）

小川将也（九州大学／非会員・日本音楽学会）

西田紘子（九州大学／会員）

大寫徹（玉川大学／会員）

討論者：忠聡太（福岡女学院大学／会員）

近年、ポピュラー音楽研究と音楽学研究の境界は、以前より曖昧になってきているように感じられる。JASPM創立以降、日本音楽学会第49回全国大会のシンポジウムII「音楽学からみたポピュラー音楽」（1998年）、南田（2002）、増田（2006）、川本（2012）、小川（1997、2019）などを通して、ポピュラー音楽研究と音楽学研究の関係は定期的に論じられてきた。その論点は、研究の対象や範囲、方法やアイデンティティ、制度や学際性の点など多岐にわたる。本ワークショップでは、これら2つがいまどのような関係にあるのかを、両領域や学会に関与する研究者の多様な立場から問う。

1人目の発表者・小川博司は、JASPM草創期から現在までの当学会の研究動向や研究方法の変化を振り返る。加えて、IASPM、日本音楽学会への参加体験を踏まえたうえで、学会のあり方、研究の場のあり方、学際性をどのように考えたらよいかについて問題提起をする。

2人目の発表者・増田聡は、上記の小川の報告に加えて、1990年代から2000年代における日本音楽学会の動向や、音楽教育大学における音楽研究の位置づけについて報告するとともに、20世紀から21世紀にかけての日本の音楽学ディシプリンにおけるポピュラー音楽研究の扱いの変化について、実体験に基づいて略述する。さらには、日本の音楽学が置かれてきた状況、および90年代以降の（政府の大学政策も含む）学術研究環境の変容に伴って、日本のポピュラー音楽研究が研究領域として自律していった過程を跡づける。

いっぽう、3人目の発表者・小川将也は、ドイツ語圏に視点を移し、「音楽学」側がポピュラー音楽およびポピュラー音楽研究をどのように受け止めたのかを概念と方法論に着目して考察する。はじめに1980年代から90年代初頭にかけてのドイツ語圏におけるポピュラー音楽研究の制度的確立の歴史を概観したのち、「音楽学」側の同時代的反応の一例として、カール・ダールハウスがシリーズ全体の編集を担当した『新音楽学ハンドブック』から第12巻を取り上げ、「ポピュラー音楽」が巻き込まれた既存の音楽学体系内での微妙な位置価を紹介する。

4人目の発表者・西田紘子は、国内の大学における教育・研究に視点を移す。具体的には、上記のような領域関係の歴史からやや離れた環境において、西洋音楽史や西洋音楽理論、ポピュラー音楽のコンテンツ分析や社会調査など、音楽学研究とポピュラー音楽研究の双方を複数の方法を用いて教育・研究する立場とその実態を紹介する。これにより、自身の教育・研究上の領域・対象・方法をめぐる感覚や、両学会における活動の関係を、一事例として考察する。また後半は、日本音楽学会の近年のテーマや研究領域の傾向を概観することで、小川博司・増田聡の報告と合わせて、学会や領域の変化を跡づける一助を提供したい。

5人目の発表者・大寫徹は、2010年代のIASPMでの議論を手掛かりに、ディシプリンと学際性の関係を再考する。IASPM創設メンバーの一人であるフィリップ・タグは、2011年の講演で、ポピュラー音楽を専門とする音楽学者としての歩みを振り返りつつ、ポピュラー音楽研究と音楽学の理論的・制度的断絶が依然として存続している状況を「認識論的惰性」と呼んで批判した。この問題提起を受け、各地域の学界における定着の過程が相次いで報告され、ポピュラー音楽研究の学問的自立性についての検討が行われた。本発表では、そこでの論点を確認した上で、学際的領域としてのポピュラー音楽研究の専門性はいかに展開しうるのかについて、「ポピュラー音楽を専門とする音楽学者」である発表者自身の経験も踏まえて考察する。

以上の報告に基づき、討論者の忠総太は、世紀転換期の音楽経験に根差しつつ『音楽する社会』（小川 1988）や『聴衆をつくる』（増田 2006）といった登壇者の著作に触発されて2010年代にポピュラー音楽研究を志した世代の観点から、従来の研究を現在の10代以下の世代が抱く音楽／ポピュラー音楽観とどのように接続しうるのかを検討する。

最後に、フロアとの議論や情報共有を行い、全体を通して、ポピュラー音楽研究と音楽学研究の関係の「歴史といま」を、音楽研究の全体像に目を配りながら議論し、今後の交流可能性を展望することを目指す。

参考文献

- 井上貴子・増田聡・久万田晋・大角欣矢・村田公一 1998「日本音楽学会第49回全国大会記録 シンポジウムII 音楽学からみたポピュラー音楽」『音楽学』第44巻3号、208-214
- 小川博司 1997「ポピュラー音楽研究の困難と課題」『ポピュラー音楽研究』第1号、2-6
—— 2019「ポピュラー音楽の変容——音楽への社会学的アプローチのために」『ポピュラー音楽研究』第23号、15-24、2019
- 川本聡胤 2012「音楽学的ポピュラー音楽研究——批判と擁護」『フェリス女学院大学音楽学部紀要』第12号、3-31
- 増田聡 2006「擬態としての「音楽学」と奇妙な近代の復活」『芸術学関連学会連合主催第1回公開シンポジウム』
- 南田勝也 2002「ポピュラー音楽研究の系譜——音楽学と社会学の視座」関西大学大学院『人間科学』第56号、1-18